

思い入れとの距離を読む

澤好摩／今泉康弘／山田耕司

実験と敬愛と

山田 第四回円錐新鋭作品賞、今泉康弘さんの推薦作品、第一位「窓がひとつだけあいてゐて」について、お願いします。
今泉 この作品を見て思い出したのは、高柳重信の初期の作品群「藍子」や「伯爵領」などでの多行形式のあり方ですね。重信は後に四行の形式になっていきますけれど、初期の頃は色々な実験をしているわけですね。単に横に四行並ぶというだけではなく、高さを変えたり階段状にしたりという視覚上の工夫があるわけです。この「窓がひとつだけあいて

ゐて」は、その実験を受け継いでいると思います。今回は作品賞ということですが、ぼくの気持ちとすれば、こうした賞というのは、既成のものではなく新しいものをつまみ新人を発掘するという姿勢で臨みたいんです。そういう意味で、手堅く今までのものを繰り返すよりは実験性があった方がよい。重信の実験だってすでに既成のものだと言われるかもしれないけれど、でもまだまだ新鮮な面があつて、この人はそういうところを自分なりに受け継いで発展させようとしている。ただ実験的であればいいというわけではないんですけれど、この作品で

は一つの味わいある世界を作っていると思うんですね。で、どんな味わいかというところ、重信の世界はかなり暗くてゴシック調の美学のようなものを描こうとしたところがあるんですが、ここでは、メルヘン風の世界になつている。そのメルヘン風の世界の中に孤独感のようなものが息づいていると思いました。ここで描かれているのは広い世界ではないかもしれませんが、繊細な感性がたしかに根付いている。それが形式の実験性とうまく結びついているという気がするんです。ここで描かれている世界というのは現代詩の吉原幸子の世界に似ているような気が

して、吉原幸子が多行を書いたらこんな風になるんじゃないかなんて、そんな気がしました。

月下

わたしのほかに

ちひさな水面

月に照らされている「わたし」とそれを映している「水面」、おそらくは水たまりが描かれていて、二行目の「わたしのほかに」とあることで、世界の広がりや想像させつつ、ここで描かれているのは「わたし」と「水面」しか世界に存在しないと、孤独な感じ、それをあざとくなく繊細にあらわしているという気がしました。

澤 ううん。わたしはそこまで評価はしないね。というよりも

蟻

蟻

蟻

蟻

にはこぼれてゆく 母（ひとり）

こういうのは、萩原恭次郎なんかにもあるんでね。模倣の域を出ないんじゃないかな。多行の可能性を探るという意味では評価してもいいとは思いますが、ただ、「この作品を成果として見る」とができるかどうかというと、私は懐疑的です。

山田 新鮮な可能性に注目するというのには異議ありませんけれど、わたしはこの作品をレトロなものとして感じてしまったんですよ。

多行にすることで、作品は視覚的な効果を受け取り、情報であることから作品である方向へと引き寄せられる。これは、多行形式の恩恵といってもいいでしょう。こうした、視覚的な要素による文字世界の拡張は、俳句形式のみならず『ダイスト新吉の詩』などに見られるようにすでに試みられているところですよ。最大の問題はそれが詩歌として成功しているかどうかというところ。

自分で多行作品にチャレンジしてみても思ったことなんですけれど、多行とは一句棒立ちの作品よりもさらに無駄な言葉を削ぎ落とさなければならぬんです。多行は、足し算ではなく引き算をこ

可能性として指し示していると思うんです。生まれてくる言葉を次々抹殺していきかねない恐ろしい形式です。

澤 それは、まちがいない。

山田 そういう視点でいうと、この作品には、「これ、要らないんじゃないの」という言葉がいくつも見られるように思いました。多行形式の視覚的要素には期待しつつも、多行形式が内包する厳しさには無邪気にふるまっているようにも見えました。

水 全

曜 山

の

朝 音

の を

さ さ

さ と

や つ

き に

水

す

し

この句では、二つの作品を並行して表示するような試みが示されていますが、

それぞれの作品が一行作品であったとしても凄みを感じるわけでもなく、ましてこのような表記にすることで、多行形式が要求する緊張感が発生しないどころか、むしろ形式にもたれかかっているのが露呈する形になってしまった、と読みました。

ただ、一方で、このような作品を新鋭作品として投稿する現代的な意味というものも感じました。現代では、作品はデジタル情報としてかんたんにさまざまな書式に注ぎ込まれる運命にあります。文字の高さや位置などを固定化しようとする形式には残酷な時代です。それをあえて投稿してきてくださったことに、誌面づくりで問われている重要な側面を指摘していただいたように思った次第です。

澤 既存の形式に乗ったものよりは実験的な作品の方を選ぶべきと今泉くんがいったよね。これで四回目の円錐新鋭作品賞の審査だけど、わたしなんか、毎回、「既存のもの、安定したもの」しか採らないって、批判されているんだよね。だけど、わたしから言わせれば、新しいものを作るといっても、無から新しいものを作れないわけだし、過去の蓄積

と向かい合いながらやっと出来上がるものだろうと思うんだよね。だから、丸ごと新しいものなんて登場することはありえないと私は思っているんです。その中で大切なのは、たとえば「てにをは」ひとつでも、どうやって苦労したかというのが見えるような作品を私は選びたい。で、こういう新しいように見せようとする作品には点が辛くなるね、わたしは。

今泉 丸ごと新しいものができないというのはその通りで、この作品で言えば、高柳重信という既存のものを踏まえているということができるわけです。その踏まえ方に、重信に対する敬愛があると、ぼくは感じました。それを少しでも現代的に表現しようとしていると感じたんです。

澤 ああ、それを感じたわけか、きみは。
今泉 すでにあるものを踏まえながら新しくしているというところに惹かれました。

澤 なるほど。

山田 高柳重信の作品を知らない人たちにとつては新鮮に見えるのかもね。

今泉 ぼくらは重信の作品をよく知って

いますけど、俳壇全体からみたら、高柳重信の作品を知っている人が多いとはとても言えないわけです。

軽さという戦略

山田 「適当」についてです。あらかじめ申し上げておきますが、冷房の風に不安をそそられり

この句などは、文法上の間違いがありませんし、内容的にも平凡です。新鋭作品というものには、こうした瑕疵があることは致し方がないとしましょう。

それにつけても、わたしは、この作品全体において、個人であることの「軽さ」でもいうものを評価しました。

門松やうどんにつける小ビール

これは名句というタイプのものではありませんが、「門松や」という改まった感じによりそう個人的点景が、俳句形式が本来内包するところの軽さを示しているように思えました。そして、作者は、どのような経緯によってかはわかりませんが、こうした軽さを意識的に用いているようにも思いました。

クーラーや適当にかくアンケート

「クーラーや」において、切字の「や」

に、季語ではなく日常的な事物を配置しています。こんなものを「や」で言挙げした上で、クーラーの内実に迫るのかと思いきや、読者は作者の日常と不意に接岸してしまうわけです。そんなところに俳句という形式でなくてはキャッチできないものを感じました。

ステージの両端にゐる水着かな

何かのキャンペーンなどで水着の女子がステージに立っている。季語である「水着」を季語としてもてなすのではなく、日常的な発見の中に埋め込んでしまう。季語の有無よりも、こうした視点のありようが俳句らしさを示しているように思えます。形式や文体へのこだわりを示す作風は重要なものですが、一方で、こうした日常性によって約束事を解体しながら、なお、俳句の顔つきをする傾向に、新鋭作品としての面白みを感じた次第です。

新鋭作品の応募タイトルが「適当」という、この軽さもわたしにとつて魅力につながったのかもしれない。

今泉 この作品の「ゆるみ」というのは、実は戦略的にやっているんじゃないかと思うんですよ。「適当」というタイ

トルも戦略的につけたような気がするんです。他にも戦略を感じるころは、季語を使っているんだけど、いかにも季語という風に使っているわけじゃないんですよ。たとえば、

あめだまを舐めつつシャワー浴びてをり「シャワー」は歳時記によつては季語になつていたりいなかったりすると思うんですけど、日常普通に使うものを、この句では一種の季語として使っているところがある。それから

壺の湯の順番待ちの裸かな

「裸」なんて現代的な感覚からすれば季語という感じがしない。

山田

噴水の跡地にたてる指揮者かな

「噴水」なんかもそうだよ。

今泉 うん、全くその通り。そういう季語との関わりも戦略的だし、軽さというものも戦略的にやっているような気がするんですよ。そして、この戦略というのは山田耕司の影響を受けているんじゃないかと思うんですよ。

山田 え？

今泉 山田耕司の句集『不純』だつて、普通あんな言葉を句集のタイトルにつけない

と思いますよ。そうした山田耕司的な方法意識というのをあえて戦略的にやっているという気が一瞬したんですね。ひよつとしたら作者は無意識にそうしたのかもしいないし、たまたま似ちゃったのかもしいないけれど、「うどんにつける小ビール」などに見られる食べ物を使うところとか、性的な比喩を感じさせるところとかは、『不純』の世界観とそっくりものを感じさせます。だから、山田くんがこれを選んだのはとてもよくわかる気がするわけです。

山田 なるほど。

澤 山田くんのを真似たとすれば、戦略がやや幼稚だよな。たしかに「あめだまを舐めつつシャワー浴びてをり」はちよつと面白いと思つたけど、「さはやかやスワンボートのなかは船」なんてのは、ちよつと意味がわからない。なんかね、戦略的というわりには、たわいなところがあるよね。もうすこし練れたら面白くなる人なのかもしれないけれど。ちよつとまだ単調だよな。

山田 「スワンボート」というのは、白鳥でございませうというたまたまいいんだけど、乗つて中に入つちゃうと、なんだただの船じゃん、という意味なん

じゃないでしょうか。そういう「なんだ、こんなもんか」という感慨に、「さはやかや」などという季語を接岸させるでしょうか。ということ、今泉くんが言ったように、季語を戦略的に使うというか、先入観を逆手に使う「肩すかし」感を抛り所にしていくような意識はあるんだらうと思うのですが。

思い込みと青春性

澤 「夜の学校に手紙を置いてきた」。これですけどね、この作品群には青春期独特のあやうい感覚とか痛みのようなものがあると思うんですね。やや独善的な部分もある。たとえば

春めいてもう永遠の子どもたち

などは、かなり独善というか独断的な言い方なんでしょう、でも、こういうところにも何かを感じさせるんだよね。

鳴かぬ蝉から標本にしてあげよう

この句にも、青春独特のヤワな感じとか痛みを感じるところがあるんだよね。

谷底の残雪やがて逢うために

この句とかにもね。

雪が降る世界の終わりまで遊ぶ

永き日の生きていくこと思ひ出す

こちらへんにも、なんかねえ、青春性があるよね。ちよつと危ういところがあるんだけど。面白いと思っただんですよ。で、このあやうさが魅力になっている作品かなあと思うね。完成されている作品があまりないんだけど。

今泉 「あやうさ」というのは、表現の不完全さということですか。

澤 表現の不完全さというのじゃなくて、言葉と言葉のつながりがあやういんだけど、そこを意識しているのが作品から見えるような気がするんだよ。表現の不完全さというなら、どれだってあやういよ。

山田 澤さんがおっしゃるのは、作者の

「思い込み」からくるあやうさなんじゃないでしょうか。「春めいてもう永遠の子どもたち」には、ある種の決めつけがある。思い込みとは、ロマンティックと同義でもあって、そこが魅力的ということなのでしょうか。

澤 ふむ。

山田 わたしもこの作品群からいたいだいてる句があつて

はつなつの白馬が駆けるはずだった

すでに渡辺白泉が試みたような文体であ

ることはさておき、わたしは、この句を「はつなつの」でいったん切れていると読んだんですね。「はつなつの白馬」で切ると、白馬なんてはつなつじゃなくたつているじゃないかという常識に跳ね返されてしまう。では、「白馬が駆けるはずだった」というのが、「はつなつ」の喩のように機能する方向に読みを進めることになりません。そうなるのと、「の」で切るわけですね。「はつなつ」と「白馬が駆けるはずだった」というイメージが、俳句ならではのアナロジー的接合をしている。これは、作者の思い込みがうまく機能した作だと思っただんです。

一方で、

寒き日や白黒写真に火をつける

こちらは、「や」を用いています。ここで句は切れていない。意味が、ベタ付き。つまり、俳句表現を手探りで確かめているようなありやうを全体からは感じます。そんなところにも青春性があるのかもかもしれませんけれど。いずれにせよ、書こうとしたことと書かれた言葉との違いなどに作者が立ち止まることで、せつかくの語の飛躍力などをさらに活かせるのではないかとも思いました。

澤 わたしは、いつもだったらこういう句をなかなか選ばないんだけど。

山田 澤さんにしっちゃ珍しいと思いますた。

澤 全体を読んでもみると、なんか感じるものがあったんだね。

今泉 下選の時には選んでおいたんですけど、他の作品との比較の中で傷が目立つように感じられたんですね。「春めいてもう永遠の子どもたち」の「もう」という言葉、これは副詞ですね。「谷底の残雪やがて逢うために」の「やがて」とか、「世界凍つ生と死をみな後にして」の「みな」とか、こういう副詞というのは、作者の思いがそのまま現れてしまいがちなところで、そうした作者の思い入れが目立ってしまうとちよつとカラ回りしている感じがしました。「はつなつの白馬が駆けるはずだった」、これはぼくもいい句だなと思ったんですが、先日刊行された円錐(84号)で、大和まなさんの句に「春の小川さらさらながれるはずだった」というのがあって、「はずだった」がすでになんかの典型になつているのかなと思つて遠慮したんですね。これがいい句だというのは、認めます。

山田 わたしは「はつなつの」の「の」で屈折しているという自分の読みにおいてこの句を評価しているわけですが、全体としては、思い入れが露出しすぎていて手当が追いついていない感じがしております。青春性やらなにやらは、そこから離れた人のノスタルジーとして得られるようなもので、そこを評価するのは、作品としての評価というよりは、選者の好みによつて、ということになりそうですね。

澤 まあ、この作品には独善的などころがかなりあるんだけどね。

表現と露悪

今泉 「Your Island」について。これは、独善的というか露悪的というのかな、「射精」という言葉の使い方、とかね。露悪というのか、無頼派というのか、北大路翼さんみたいなの、そんな感じがある。でもそういうものって、現代の「俳諧」性だとぼくは思うんですね。花鳥諷詠的なきれいな世界が完全に既成のものになつているのに対して、ここに出てくるなんだかやぶれかぶれみたいな衝動つ

ていうものが、ひとつの「生きている」感覚を伝えてくる。抑えがたい衝動みたいなものが俳句の中にあふれているような気がしたんですね。

この作品には、外側に向かって攻めていく感じと内側へと逃げていく感じ、そんな二律背反的な感覚が同時にある。そういう情緒不安定でアンバランスな世界が、言葉の使い方の中に込められていて、それなりに形象化されている気がしますね。

地球の皮の模造貼りつけ俺の部屋

末黒野を翼と思ふ俺たちの

一息にお前を見れば黄金の海

「俺」「お前」というような一人称を読み込むのは、佐佐木幸綱とか福島泰樹とかの作品にすでに使われているところかもしれないけれど、この作品群においては一つの生命感につながっている表現だなとぼくは感じました。

山田 なるほど。面白い作品群です。言いたいことがはっきりあって、むしろ、言いすぎて答え合わせ的なことも盛り込まれてしまつている。たとえば、「俺の掌は寂しい三角州全部射精す」の「寂しい」とか、ね。

臆病で巣箱みたいに拙いんだ

「拙いんだ」もそうかな。

馬の眼よ父性は遠い鳥なのか

この「遠い」も、答え合わせ的な露出でしょう。

末黒野を翼と思ふ俺たちの

「末黒野を翼と思ふ」まではいいとして、「俺たちの」は、蛇足。こういうところの手当が緩いので、無頼というよりは甘さの方が目立ってしまった感じがしましたね。

澤 わたしは、こういう句については渋谷のスクランブル交差点を眺めているような気がしちゃうんだよね。ぜんぜんひっかからない。

山田 渋谷のスクランブル交差点を歩く人にもそれなりの見出すべきところはあるんだと思いますが。

この作品群には、読者の中で生まれるべきところを作者があらかじめ言ってしまったというもったいなさを感じました。まあ、読者が作者が泣いていないところを読むべきだというのは、わたしの先入観で、時代は必ずしもそういうことを自明としているわけではないのかもしれないけれど。

さて、わたしは私生活を露出、あるいは露悪的に書く作品にはあまり惹かれたいのです。一般論としてですけど、「どっちが不幸か」というように事柄の重さがあるまま作品の価値であるかのように扱われてしまうことに共感しないからです。

今泉 実際を露出しているどうかはわかりませんが、露出しているように読める作品を作っているんでしょう、この作品群は。

山田 そうですね。性的なものを書いたからって、読者が性的な気分になるかと言えば、必ずしもそうではない。むしろ、きつちりと即物的な句に、妙なエロティズムを感じてしまうことがあるのも俳句ですね。そういう微温的な俳句環境の中で、くつきりと露出的な文言を打ち出していることの新鮮味というのは、わかるような気がします。

澤 年齢が離れていると、捉え方もこんなに違うのかなって、思っちゃうね。

山田 感性の違いというのは、人によりけり、ではないでしょうか、年齢という要素よりも。

既視のなかからの発見

山田 「動物園前」について。既視感があるとこの作品群を批判する向きもあるかと思いますが、ここで作者がチャレンジしている「ひとつのものから何かを剥ぎ取る感じ」のようなものにわたしは惹かれました。

鯛焼の影より鯛焼は剥がれ
散文的な説明で言えばたわいもないものか、あるいは哲学的な洞察のどちらかに進んで行きそうなことでも、俳句では、ものに寄り添いながらさらりとすくい上げることができる。それは自明のものであらためて見直して発見するようなまなざしは、俳句の魅力のひとつだと思えますね。

遅刻してある外套を出られない
外套を脱いで仕事に取り掛かる近未来をイメージする自己。それと、遅刻しているために外套の中に居続けなければならない自己。このふたつを一举に形にするのも、ひとつのものを多元的に剥いで分ける感覚のバリエーションだと読みました。

影淡きアイスクリームつまあがる

こんなところもね。一方で、
百千鳥つき出るものをみなひねる
「百千鳥」が季語として添えもの以上の
役割を果たしていないし、「つき出るも
のをみなひねる」という表現も読者を揺
さぶるものではない。

猿山に主なき日の桜かな

花守はペンギン番になりすまず

「主」という意味づけや「なりすまず」
という認知、こんなところに俳句として
の手当が及ばず、意味の上でのスケッチ
に止まっているという観もあります。

ただ、対象の中に見届けようとしてい
るまなざし、その可能性がわたしに訴え
てくるものがありました。

澤 この人の句にはいくつか丸をつけ
ていて

影淡きアイスクリームつまあがる

象の背を象は知らざり星祭

落し水太平洋は星を容れ

「落し水」が絶妙だなと思ったね。ミニ
チュアな世界と壮大な世界とのダブルイ
メージが効いていると思うね。

今泉 ふうむ。

山田 逆選、つまり×がつく句が少な
くならず入っていると、作品全体への信頼の

ようなものが下がってしまうという傾向
はありますね。しかし、わたしの感覚と
すれば、この作家は、もつと俳句を作り
続けるだろうし、それをわたしは読みた
いと思ったわけです。

澤 面白くなる可能性は、あるわな。

今泉 ぼくも、ところどころいい句があ
るとは思いました。けれど、「動物園前」

というタイトルで、全体をひとつの連作
として書こうとして、苦心して動物を描
えたという感じがしました。そして、動
物が並んでいることから何かが発生する
のか、と思いきや、それは生まれていな
いなと思います。無理して動物を並べ
しまっているの、面白くない句も含ま
れることになったのでは、と思いました。
山田 均質に良句を二〇揃えるというの
は、難しいですね。
澤 そうなんだよ。それは誰にとつて
もね。

澤 「光のある世界」について。これは
ある種の統一感がある。光とか色とかね。
やつぱり切り込み方がちよつと甘いん
だよ。その中でも

折り紙の影も折りみて夜の秋

上がるたびジャンプする子や遠花火
あたりはなかなか面白いと思ったんです
けど。

山田

折り紙の影も折りみて夜の秋

糸蜻蛉止まり身の色定まりぬ

この二句には丸がつけてあります。

一方で、既視感というか、安定感とい
うか、そういう作品が全体をしめている。
澤さんが推すんだったら、この句群の方
じやないかと思いましたが。

澤 うん、そう。いちばん最初はこれ
を最優秀としていたの。でもね、これは
統一感はあるんだけど、新鋭作品という
ことになるよね、新鮮味がある方を上
にしちゃった、ということだね。

山田 そうですね。新鋭作品には、なに
かちよつとハミダシたものがあることを
期待しちゃうわけですね。

五分咲きといふゆとりもち冬桜

「ゆとりもち」という認識は、俳句とし
ての意味を伝える一方で、表現としての
切れ味を減退させますね。意味上の手当
が手慣れているのは、俳句作品の緊張を
ゆるめてしまいかねないと自戒を込めて
思います。

今泉 そうですね。「ゆとりもち」が象徴していると思いますけど、もう生活にゆとりのある人が花鳥諷詠を弄んでいるのが眼に浮かぶんだけど。

山田 (笑) それは今泉くんの攻撃対象になぞらえすぎなんじゃない? それにつけても、意味上の整合性を句会などでは問題にしがち。つまり、わかる句を重んじるということですね。それに対置し、相対化するという一点において、写生というものを評価します。写生したかどうかではなく、写生したように書かれているかどうか、ということが、意味上の手慣れた感覚を吹き払う方法のひとつだろうと思うのです。

澤 ああ、そういう落とし方かよ、って見切られちゃうのを避けたいところだよね。

山田 そういう意味上の整合性をこそ評価する結社などは、少なくともいいでしょうね。

今泉 一般の俳誌だったら、レベルが高いつて言われるんじゃないですかね。著名な俳人でも、この作品より下手な人なんて結構いると思いますよ。

澤 そりゃそうだよ。

紙幅の関係で掲載はここまで。

各人のまとめの言葉を。

澤 一句を書くときに何を言いたいのか、何を読者に受け取ってもらいたいと思っているのか、それがわからない作品が多かったね。作者の狙いというのが理解できない。それは作者の詩的洞察力や類推力が足りないということもあるのかもしれないけれど、何か驚かそうとしてヒネリをかけても、それがヒネリではなくて脱臼しちゃっているのが見受けられるね。言葉の脱臼が目立つ、そんな気がしますね。

今泉 色々な傾向の句があるんですね。ですから一言ではうまく言えませんが、ただいくつか共通して気になったのは、副詞「もう」とか助詞で「だけ」とか、そういう自分の思い入れを込めた言葉そのまま使っちゃっている句が目立ちましたね。

今回は既成の花鳥諷詠に近いところから、実験的な句まで、右から左までであるけど、そのことは、全体に共通して言えるような気がしましたね。それはその作者の思いがそこにある、思いがあつて言いたいことがあるというのは良いとは思

うんですけれど。

既成の印象を繰り返すだけ、なぞるだけ、という季語の使い方も問題ですね。それは、読んでいても全く面白くない。

今回ばかりは多行の実験性をおもしろいと思いましたが、花鳥諷詠的な世界観も、今言ったような新鮮に見せてくれるような工夫があつたらそれはいい句だと評価したいですね。

山田 これで第四回となった円錐の新鋭作品賞です。今まで一度たりとも審査員全が一つの作品を推すというふうになつたことがないですね。それが、円錐らしいことなのかどうかは措いておきましょう。ただ、表現の多様性や掲載メディアの多層性なども広がりがつつある現代においては、評価の一元化を目指す現状とすることの方こそ、もう一回見直さなければならぬのかもしれないと思つています。今回の座談会のように偏つた見方というか、歯に衣着せずというか、そんな円錐新鋭作品賞の審査が、これからの作者のみなさんに役立てていただけるようでしたらとてもうれしいです。